

分野（１）

小児・思春期を対象とした環境保健事業の事業実施効果の適切な把握及び

事業内容の改善方法に関する調査研究

① 健康相談事業の効果的な実践及び改善のための評価手法に関する調査研究

研 究 課 題 名： 健康相談事業の効果的な実践及び改善のための評価手法に関する調査研究

調査研究代表者氏名： 小田嶋 博

評価コメント

○長年に亘って培われたフィールドがあるので、それを活かしての調査研究は将来にも大変役立つ研究の対象となりうる。

○受動喫煙と尿中コチニンとの関連が認められたことを評価する。

○尿中のコチニンの測定と唾液中のコチニンの測定とを比較し、どちらの方が臨床的にはより有用性があるのか、検討の要あり。

○長年に亘って共同研究を続けてきた地区の対象医に地域の学校や医療機関、保健所等を中心に進められている研究であり、主に心理的側面からの解析に加えて喘息の発症、予後の影響を与える喫煙の問題を取り上げている。喫煙の問題は別の新宅らの研究でも取り上げられており、その指標として尿中コチニンを取り上げている。喫煙の影響に関する調査は新宅らの唾液中コチニンを指標とした調査と重複するところがある。尿中コチニンの測定はクレアチニン濃度による補正值を用いているので、ほぼ問題がないと思われるが、今後更なる規模における研究の成果が期待される。

○尿中のコチニン濃度が受動喫煙の客観的指標になりえることを確認できたのは一つ成果である。ただ、各研究の内容に統合性が欠けているような印象を受ける。

○喫煙の低暴露群も高暴露群も喘息の罹患率に有意差を認めなかったということであるが、尿中コチニン濃度が非常に高い群と低い群とで比較した場合も有意差は認められないか否か更に検討を重ねる必要がある。

○呼気NOとアドヒアランスの関係は興味あるデータで、呼気NOの臨床的意義について今後も研究を続けてもらいたい。

○今後は鬱傾向にある子どもの改善にどの様に対処し、改善をはかり得るのか示してもらいたい。

受動喫煙の影響を本邦学童で確認した点は評価できる。服薬アドヒアランスの二極分布については低アドヒアランスの特徴は介入による評価も要するとも疑われる。

○鬱の傾向のあるものは喘息の有症率が高いということであるが、喘息があるから鬱状態になるのか、あるいは鬱そのものが喘息発症・増悪因子になるのか以前から議論の多いところである。この辺りのところの解析が必要である。

○以前からのフィールドを利用した、様々な調査が行われており、コントロール不良群とうつ傾向の関連性、特にアドヒアランスの悪い生徒の特長、効果の評価方法としての呼気NO濃度キャンプ等の介入後の推移など、いくつか新しい知見は認められるが、概して従来の知見と変わったところは少なく、調査がマンネリ化している感は否めない。

○健康相談事業の効果的な実践と改善のための評価手法の具体的な例を示してほしかった。